

貸家一覽

泉鏡花作

—

差配おほやの古帽子ふるぼうしが、提灯ちやうちんを點つけて、のこ／＼出でて來きた。

「大分騒だいぶさわがしいが何かなにかね、路地口ろぢぐちでわあ／＼言いうとる小兒こどもたちに聞きくと・・・・・・何かなに其その日暮ひぐれ前まへに、此この貸家かしゃを見みに來きた男をとこが、其切それきり出でて來こないと言いふが、眞個まったく然さうかね。」

「え、眞個まったくですとも、私わつしあ未まだ晚飯ばんめしも食くはねえんで、」

と職人風しやくにんふうのが、腹掛はらがけなりに下腹したはらをぐいと壓おさへて、「仕事しごとから歸けえり匆々さう／＼、それツてんで、恚かうやつて出でて見みたんですがね、なあ、お吉きち。」

と前垂まへだれかけで半纏着はんてんぎの女房にやまひつを、頤あごで突つつくが如ごとくに一寸見ちちうみる。

「夫やどでも心配しんぱいをしましてね、お隣となりづから平次郎へいじちろうさんにも聲こゑを掛かけましたんでございます。」

「こりや、御差配様、御苦勞でござります。」

と平次郎は、皿が薄秀の天窓でお辭儀をして、

「私共 ぢや、雑と住居を掃出して、神棚へお燈

明をあげました處へ、これ／＼だ、とお隣のお話

しで、早速出ました。何うも些と變でござります

て、

「ねえ、」

「然やうさ、」

背後の方で、長屋同士が言交はず。

「變な事は別にござせん。」

と差配は提灯の灯に澁い顔色。

「何も變な事のあらうわけはござせん。」

と聞えよがしに呟いた。――私は傍聴しなから、

略差配の不機嫌な意味を頷いた。

時に慙く言へば、たとひ取極めはせぬまでも、知

つて居ながら――頼まれて、貸家を探すのにあ

やかしの憑いた家を兎に角見に行つたゞけも怪しか

らず思はれよう。――實際都合が可ければ、間に

合はせて置かうと云ふ考であつた。

けれども此の貸家が、以前、私が知つて居た頃、三年四年空ツ切で、何うにも借手がつかないで、殆ど立腐れの體で、界限では臺町の妖怪屋敷と噂した。――一年の秋の夜に、古い大構の冠木門が、暴風雨に倒れて、垣根ごと往來へ崩れた下へ、根ながら芭蕉を引挫いた、葉尖が、骸骨のやうな木組の穴から裂けて出て、私を通ると、まだ■が留まぬ霧の中に、あけ方の朝風に、のた打つて藻掻いて居たが、何うやら死切れずに黄色蛇の頭が煽つて居さうで、踏跨いでは通れずに、路を引返した事がある。――其の頃の屋臺つきなら、頼まれた人のために、振り向いても見るのではなかつたが、其の日、通りが、りに不圖氣がついた様子が、全然、がらりと違ふ。

其の門など跡方なし、廣くはないが、見通しの路地に成つて、路地口兩方とも長屋が出来た。突當りに新しい木戸が見えて、其を入つた中に、新築の二階家。

見た處で、最う暮方ではあつたか、其の左の角の長屋の羽目に、木の貸家札、向うの木戸にも白く斜

めに貼つてあり。

先づ誂への二階家、立寄つて讀んだ處では、疊
建具、水道つき、これで庭があると申分はないが、
書出さない様子では些と怪しい。が、何か勞力惜み
をするやうでもあり、恩に被せがましく心苦しいけ
れども、實は此の四五日探し飽倦んだ。

處へ先方は急ぐ、と云ふ。折角の頼みを、土地に
居ながら、唯未だ見附らない、とばかりでは餘りに
本意なし、然うかとして、二階家とある註文を、身勝
手に階子をひいて、平屋も如何で、眞個途方に暮れ
た折から、見附つたのが、此の貸家で、札の表の、
間取の都合も悪くない。これなら、兎に角、知らし
て遣れよう。．．．．．最う暗かつたけれど
も．．．．．

構はず、燐寸を摺つてなり、雑と見た上で、と思ふ。路地に小児が四五人、夕月の影もないのに、子を捉る子捉るするが如く飛び匆ねる、路地の中も又人集り。女まじりに長屋の衆が立會つて喧々する。――あとで名が知れた、其の平次郎も居たが、井戸端會議の崩れる頃と、些とも猶豫はないで、私はつか／＼と入つた。

長屋は恚う建續いて、見違えるばかり開けたけれど、臺町も最う裾で、茗荷谷の水溜り、前の古屋敷の圍内とて、其の頃木槿垣の本の露、末の雫の点滴絶えず、窓を覗いた律のなごり、刈萱の雨も乾かずや、濕地に敷詰めた石炭屑を、ざく／＼と踏む下駄の跡から、落葉が出さうにじと／＼して、きら／＼と黒く光る。

其の路地が且つ狭い。貸家の木戸へ打つかるのに、人を分けずには通れなかつた。

「御免なさいよ。貸家は突當りのでせうね。」

と聲を懸けると、其まゝ眞中を開いたから、直ぐに間を抜けようとすると、瞬間、寂寞した。時に、一人が、顛のうすい平次郎。

「一寸、もし家を御覧なされるには、最う暗うございますぜ。」と云つた。

私は何の氣なしに、振り返つて、

「少々急ぎますので、間取だけでも見たいと思ふんですが、何うでせう、晩方で御迷惑か知ら。」

「何、旦那、此方人等迷惑も何もあつたものぢやありませんがね、まあ、お待ちなさいまし、些と其の變ちきなんで、」

と頸をすくめて、職人が言ふと、女房が一寸衣紋を繕ひながら、

「唯今、其の事で、皆が然う申して居ります處でございませがね、先刻、其の何なんでございますよ、……まだ貴下、日のある中でございまして。旦那のやうな、矢張お勤人らしい若い方が、一人、お入んなすつたんですが、まあ、何う遊ばしたんだか、其ツ切、いまだに出ておいでなさいませ

ん。尤もね、何時の間にか、お歸りなすつたのを、見落したらうと言へば其までゞございますけれど、毎々をかしな事ばかりですから、今日は賣下、起居に氣をつけて見張つて居たんでございますから、

「をかしな事つて、おかみさん、．．．．此の家は怪いのかね。」

と私は引返して中へ交つた。

「大な聲をなすつては不可ません。」と平次郎

が路地口を透かして言ふ。

職人は腕を組んで、

「差配がむくれまさ。へ．．．．それだなくつてさへ、家賃の取立が嚴いのを遺恨に思つて、此方人等で、けちを付けるんだ、と惡推をしますからね。早い話がお前さん．．．．なんだつて彌次馬に飛出して、恚う騒いでる連中に、二つなり三つなり滞て居ねえのは一人もねえんで。えゝ、希代なもんです。きちん丁と店賃を入れるやうな奴は、カタリとも言はねえで澄まして居まさ。菜ツ葉のお汁、鹽引の鮭で、ひつそりして飯を食つてら、ねえ、

平さん。」

「私ども、矢張り其れぢや、滞る分ですかな。」
と平次郎は天窓を壓た。

職人が、ぐつと参つて、

「まあさ、ものゝ道理でさ。」

「お氣をつけなさいよ、お前さん、何て口を利くんだらう、」

と女房が横目で睨む、と平次郎はクスリと笑つて、
「三月四月は袖でも秘す、尤もこれ腹帯でね、人に相に露れて居ます。決して御遠慮には及びません。」

と人の好さうな中親仁。職人は色を直して、
「何しろ、私あ、それ、恥を言はなきや理が聞えねえと思つたんで、ねえ、旦那。」

「人、何が理なもんかね。」

と女房は賤めながら、私の方へ向直つた。

「ですが、貴下、眞個でございますよ。」

と言ふ、貸家の門を、密と窺たものがある、ト其の肩越に負はれかゝつて、齊しく覗込んだのが、す

た／＼と逃げて歸る。

三

此の徒の言ふのを聞くと、此處へ、二階家を新築してから以來、未だ住着いたものは一人もない。のみならず、日に幾人となく見に来る、唯つい通りにひやかして歸る分には、何事も起らぬ。が、何うやら氣に合つて、話が取極らうとする輩と來ると、必ずとも無事では濟まぬ。

大した怪我はしないまでも、階子段から迂り落ち

る、二階の窓から見響を覗いて、首が挾つて動けなかつたり、戸まどひをしたり、不意にばた／＼と襖がはづれる、はゞかりの戸が、ギイとひとりで開く。．．．．．何處の釘へ引掛つたか。．．．．．装おろしらしい縮緬の羽織が裏搔くまで、すつかり裂けて、ベソを搔いて歸つた圓鬚の婦人も現に女房が見たと言ふ。

「私が知つてるのは洋服を着た、立派な旦那衆でございませうがね、ピンと髭の生えた。其の方が、入つて大分ゆつくり見て、歸りに格子戸を出るが否や、唐突に大な聲で、謠を唄ひ出した。で、路地を出て通へかゝつて、づつと其の遠吠の響いたのは何うでございませう。こいらも考へて見れば變ぢやございませんか。」

と平次郎が低聲で饒舌る。

「まだ／＼數へ立てをすれば切はないんでございませよ。――何でも初中 出入りの人を見て居ますから、此の人は氣があるか、何うか、大概風附で知れますからね。今申しました、先刻の方も、何

うやら思召がおあんなさりさうな御様子ですから、
おや／＼おや、さあ又、始まりさうだ、と氣を付けて居りますと、御覽なさいまし、今以て出て來ないぢやありませんか。追つけ五六時間に成りますもの。何が何だつて、皆が氣が／＼りでございますわ。旦那もね、それですからお見合せなさいまし。」

と女房のまめだつ尾につき、

「何うでも御覽なさるなら、明日眞晝間が可うかすよ。」
と職人も眞面目で言ふ。

「黙つて／＼。」

と平次郎が傍から袂を曳いた。

「差配が來ました。」

「おつと、危え。」

「旦那、何にもお聞きなされない分に願ひますよ。然うでなくつてさへ、長屋中でケチをつけるなんてひがむんですから。」

處へ提灯が割込んだのである。と同じ古帽子でも飴屋のとは違つて、小兒たちには禁物で、兜と見え

る。遁際の鯨波の聲わつと言つて、路地口を散つて了つた。

で、二言三言、店子たちと言を交へた後が、

「變な事はごわせん。」

と苦つて、ごそりと音する板のやうな茶の外套の

袖の袖ながら、四ツ目の紋の提灯が向うへ上げて、

廂のあたりで、二階家の木戸を透して、

「寢ても居るのだらう、厄介。」

「へえ、寢て居りや躰が聞えさうなもんですぜ。」

と職人が頭を振る。

「蟒蛇ぢやあるまいし、」と暗い所で誰かぞ咳

く。

其聲をじろ／＼と、睨むが如くニしながら、

「其で何かね、まだ誰も入つては見なさらんのか

ね。」

「其處でございまして、へい、御覽の通り、路地

は未だ薄明りで、足許が分りますですが、家の内は

眞暗で、おまけに空屋でございまして、閉込んでご

ざいませう。づか／＼入りまして黒白は付きませ

ん。處へ、恚う揃ひましても、提灯と云ふ要害はなし、裸火や洋燈では、前方が尋常なりません内で、時々ぐら／＼と來ますから、悪く粗相でもいたしますと大事だと存じまして。」
と平次郎が揉手で言つた。

「詰らん事を言はつしやい。經師屋さんはいゝ年をしなから、」
と又しても、差配は苦つて、
「建てゝ半年にも成らねえ家が、大風が吹けばとて、ぐら／＼して堪るかい。」

「えゝ、ぐら／＼しねえまでも、何ですぜ、盗人や狂人が遁籠つたツて譯ではねえんで、私どもだつて棒ちぎりで威勢よく躍込むつて法にや行かず、然うかつて、これが、差配様の前ですけれども、素手ぢや危え。．．．．．てつたやうな。」と職人はあとを口籠つた。

「何が危い、釣天井があらうぢやなしよ。」
と差配様は八方睨みで、提灯をぐるりと廻すと、

四ツ目の紋が、素早く環に成る……怪しい邸
を控へたゞけに、一ツ目小僧の躍るが如し。

四

「危えものか、私が見届ける、何、馬鹿な。」
と奮然たる態度で、差配は兩腕を張つて、弓杖を
支いた體、提灯を掴んだ勢。但し小男の、外輪に威
張つて踏張るほど、腰附が妙に浮いて、ひよこ／＼
と木戸に向ふと、これは一枚戸が右へ引いたまゝ、
入った切り出ないと言ふのか開けた切か、其とも長
屋の連中が、覗くために其處までは手を掛けた
か……閉めずにある。

と差配さはいの古帽子ふるぼうしは、蝙蝠かうもりのやうに低く潜ひくつて、先まづ木戸きどの中うちへ一騎駈きがけ。

までは可よかつた。さて二の木戸きどへ懸からうとして、猶豫ためらつて振返ふりかへると、職人しよくにん、女房にようぼう、平次郎へいじちろうをはじめ、二人ひとりも二番手ばんでが續つかないで、いづれも木戸きどへ附く着ついて、眞黒まつくろにかたまつて、三面六臂めんろくべで覗のぞく。差配さはいを除よけて路地口ろぢぐちへ退散たいさんした臆病おくひやうものまで、故わざと、此處ここまでは引返ひきかへした癖くせに、片足かたあしも踏込ふみこまぬ。

這奴しや、續つけや、ものども、と言いひたさうな目色めつきで、じろ／＼と行やつたが、天窓あたまばかりが振々動ふる／＼うごいて、どの足腰あしこしも据すわつて居ゐる。

「然さうだ／＼、」

と差配さはいは木戸きどの中なかで一ひとつ廻まつた。

「仕立屋したてやの内うちは、つい目めと鼻はなの間あひただ、屹きつと様子やうすを知しつて居をらう。」

と獨言ひとりごとをする。

「お美嘉みかさんの許とこで、些ちつとも沙汰さたがないぢやないかね。」

「然さうさね、變へんがありや一番ばんに知しれるのは、其處そこだ。」

此方で平次と女房が言ふ中に、差配は又ひよこ／＼と二足ばかり、目ざす二階家の入口ならず、――横に向つて、幽に灯のさす戸口がある、――其處へ立向つて、石炭屑を、ざくりと踏占め、

「阿媽や、阿媽や。」

木戸連も袖を引合つて、目を見合せた、と云ふのは……返事がない、精進 日でも孀婦でも、恚う宵の口は寝ない筈。

「おい、阿媽、寝たのかい。」

まさか、敲くでもないから、手を掛ける次手に、格子戸をがたりと言はせる。

しばらくすると、怯えたやうな陰氣な聲で、

「誰方様でございます。」と妙に愛想のない切口上……尤も突慳貪に言つたのではないらしい。寂しく滅入つて、枯木の尖つた鹽梅、花も實もないのであつた。

「私だよ、阿媽よ、佐々木源兵衛だよ。」

と差配は提灯を差上げて此處で名告る。紋の四ツ目に著しいが、何うやら梶原と言ひさうな親仁が。

「……差配様でございますかね、」とがた／＼音をさせて出て來た様子で、やがて靜に格子を開けた。

と差配は提灯を下げたし、住居の灯は背中なり、影法師が立つた體で、此方から顔は見えぬが、束ね髪がみの老けた婦をんなだ。

「まあ、差配様、」と漸と人らしい聲に聞える。

「寢たのかい、最う。」

「否、何ういたしまして、それ處ではございません。まあ、お上り遊ばして。」

「や、何、然うはして居られん。早速だがね、私が許この此この貸家かしやだ。」

「は、はい、」と、何故か急込む。

「お前さん許からは、坐つて居て此家の縁側へ手が届く。一つ家も同然で、すつかり様子が分るだらうが、日暮前、まだ早かつたさうぢや、書生風の男

「お美嘉さんは何うなさいました。」と聞く。

女房の此の二の句で、姨さんは落着いたらしい。

「おや、今晚は。否ね。あの娘が其の、何うも飛んだ恐しい事を見ましたので、最う貴方、夜具を被つて小さく成つて震へて居ります。私 は枕頭で、お念佛を唱へて居りました處でございますよ。はい、何うもね、未に震へが留りません。」

「おや／＼、そりや、おかみさん、まあ、まあ皆さん、お美嘉さんが・・・。」と聲を出す。

「何だ、何だ、」「何うなすつた。」

と之を機に、四五人どや／＼と込入つて、半纏の裾、羽織の袂が、差配の提灯を押取巻く。・姨

さんの聲は大分調子が治つて、

「何うと申しましてね、貴下がたへお話をいたしますほどの事でもございませぬ。言はゞ、まあ取留めが無いのでございますかね。實は何でございませよ。晩方ね、貴方あの娘に留守をさせまして、私が

ひとり
一人でお湯に参つたのでございまして。――何も
今日に限つて蟲が知らせましたと言ふほどの事でも
ございませうまいけれど、お隣の空家が氣味が悪いと
申しまして、――
と又さし合を言つた。が、最う我を折つて差配
は默然。

「一人で留守をするのを厭がります。馬鹿なこと
をお言ひなつて、私がたしなめまして、まあ、出掛
けましてございませうが、然うでもない、まだ暮合に
燈を点けます、洋燈に粗相でもあつては、と氣にな
りますので、糠袋を濯ぎもしないで、急いで歸つて
来る、と何うでございませう。」

此の貴方、框の處へ摺出したやうに成つて、突臥
して居るぢやございませうか。丁ど雛兒か巢から落
ちましたやうな形でさ、厭ぢやありませんかね、私
は暗がりながら跨がうといたしました。まるで何時
かの雷様の時のやうな様子でせう。まあ、何うし
たんだねツて慌てゝ聞きましたら、煙草盆が、煙草
盆が、とわな／＼します。何だえ、煙草盆を穿いて

轉ころんだつて言いふのかい……否いへ、煙草たばこ盆ぼんがひ
とりで歩ある行るいてお庭にはへ出でました。……

美嘉みかや確しつかり乎りしておくれよ、と其それから温湯ぬるまゆなんか飲の
ませまして、漸やつと落着おちつかせて聞ききましたでございます
かね。――矢張やっぱり其その家うちを見みに、お隣となりへ入いらしつ
た方かたでございますよ。」

「ふん、何どうしたな。」と差配さはいの息いきは、ずんで
聞きこえた。

「私わたくしどもでは明あかり取とりに成なります、庭にはの、あの、
向むかうの縁側えんがはの處ところへお躰しやがみなすつて、

『やあ、よく出で来た、これは不ふ思し議ぎだ。』つて
お言いひなさるんでございますつて。……娘あね
はお誂あつひへものゝ小袖こそでの裾すそをくけて居ゐる處ところでございま
してね。――御串戯ごしやくだんに、仕立物したてものをお賞ほめなさる
んだ、と思おもつて、極きりまが悪わるいから、顔かほを脊そ向むけて暗くらい
方ほうを向むきましたさうですが、村むらへ何里なんりあるか分わか
らない、こりや大變たいへんな山奥やまおくだ。おほ、雲くもが湧わく、

霧がくくると、
「ッてお言ひなさる……何
うも獨言のやうでございます……」

「狂人かね。」

「然うか、狂人か。」

と口々に言ふのであつた。

「否ね、娘も大方然うだらう、と思ひましたつて、
其でね、貴方、」

と此の時下駄を穿いて出て、格子へ立つた。

「仕切の袖垣から、透かして見よう、どんな人だ
か、と思ひました。まだ其の隙もなかつたと申しま
す。此方を向いたなりで、次の長火鉢の處を見て居
ました、其處に炭取と並べてあります、煙草
盆……極く粗末なんでございますかね、其
が貴方ね、スーツと恚う……釣縄で引張る
やうに、疊の上をずる／＼と曳摺られて、娘が前掛
に引付けて坐つて居ります、篋附板の前へ、ずつと
来て、何の音もしないで、袖垣をするかと思ふと、
泡のやうに消えたんでございませう。—— 悚然

として貴方、ぐる／＼巻にしめつけられましたやうに、膝も胸も固くなりました。．．．から／＼と鈴がひとりで鳴つて、蝗が飛びますやうに、鍔が板の上を落ちると一所に、物尺が一つ立つて、ぱつたり倒れる。出来かけの小袖がすらりと摺つて、袂を開いて、袖口を巻きましてね、裾をぴつたりと搔込んで、何の事はありません、其の縞柄で、手を支いてお辭儀をするやうな形になりますと言ふと、篋附板が、ふうはりと疊を離れて上りました。」

六

それを、事實だ、とすると、娘が唯突俯したくらゐで済んだのは、寧ろ僥倖であらうと、私は思った。

で、姨さんの言ふ處に因ると、娘の話を聞いたが半信半疑で、早速あかりを點ける、手が震へる、そのは／＼とツちて、點けては消し、點けては消した。其の灯で明取を見れば、袖垣をはづれた、別に飛石もないが小庭の濡地に、件の煙草盆が、ト灰吹かスポンと眞直に、氣もない風に据つて居る。縁側もない長屋の、疊から直ぐの雨戸の、其の敷居へ片端懸つて、其の篋附板が、矢張小庭へ、丸木橋が落ちたやうに斜違ひ！

いや、最う、取入れる方角もなしに、急いで、ばた／＼雨戸を閉めて、預りものゝ小袖は、と氣遣つて見ると、此の分は娘が話したほどではなかつた。幸ひ婦が手を支いたと言ふまでの形でもないから、急いで袖疊みにして、藏ふ處へ。さあ、引窓をしめる、水口の鎖を下ろす、門口だけは、便になる人もあらば、訪寄つて欲さに、まだ閉めないが、其でも最う榮螺の底へ閉籠つて、七輪の風を聞く心地。娘が引被つた夜具の枕頭に、カン／＼洋燈の心を出して……其の、お念佛だつた、と話す。

「ふん、」と差配は言つた切。

一同も顔を見合せた……

「貴方が御差配で在らつしやいますか。」

と私は其處へ割つて出た。而して、貸家を見に來たものが、不思議な話に、つい立停まつた次第を告げて、

「如何でせう、其の提灯をお貸し下さいませんか。間取りの都合を拜見して、大概なら、何、何」

と、其のぐつと力を入れて、

「取極めて頂きます。次手に様子を見ませうぢやありませんか。」

と事もなげに莞爾笑ふと、何と思ふか、差配様もむつかしい皺の中でニヤリとした。

「折角來たものですから、御承知下さいまし。」

差配は、かさ／＼と身じろぎしたが、件の外套の袖を兩方へポンと開いて、古帽子を引ちぎるやうにかなぐり取る……皮ごと引抜つたか、と思ふ附着き加減、此の親仁が人に逢つて帽子を脱ぐのは、一生に算へるほどよりあるまいと思ふほど、太

い眉毛に黒く塗りついて居たのに。・・・で、
「一つ御研究を願ひますかな。」と慇懃に言つた。

私は聊か恐縮した。が、さて洋服は着ようもの。

「では、お提灯を。」

「さ、さ、御遠慮なくお持ち下さい。女ばかりで、何か怯えて居ます、氣の毒千萬な。此の阿媽の處に、先づ話しながら一つな、蕎麥でも取つて待つて居ますで、御覽濟の上は様子を何うぞ、え、」

とぶよ／＼した外套の胸を張つて、向直つて、

「いや、誰方も御苦勞な、皆引取つて貰はうかね、町から見てもぢや、何か事ありさうで外聞もようない。とんと小火でもあつたやうな騒動。兎角碌な事は言觸さぬものだから、尚ほ此の上に、然うでもない變な噂でも立てられると迷惑をします。源兵衛迷惑ぢや。」

と柄にない大音聲で、じろ／＼と睨廻すと、平四眞先の後退りで、尻から、もそ／＼と木戸を抜ける。續いて四五人ぞろ／＼と人影を吐出した。其の後を、

大手を擴げて、差配が手に、からりと鎖す。

私は衝と二階家の門を入つた。濕つばいが、冴えた、新しい、木の香が芬とした時、姨さんの格子戸が、ごろ／＼と閉る音・・・ふと氣の所爲か、心細いまで、遙かに聞えた、雨に隣が隔つたやう。

然う言へば宵暗の、あの空あひ、此の途端に降つては來ないが、高い屋根から、壁、柱へかけて、幽ながら、颯とかゝつて來た氣勢がした。私はさすがに猶豫つた。

提灯を翳すと、框の障子へ■と朱色に映る。棧が眞新しく、貼つた紙が薄りと黒んで居るから。がさ／＼と足に絡つたのは、鋸屑で、下駄をすくつて、下から浮かせ状に持上げられるやうなのを、ぐいと踏脱いで、どんと上つた。

先刻入つたと言ふが、開けたまゝか、此の障子も、門の戸も開いて居たのである。

上がり端は、細長い六疊で、新しい疊が、人は住まぬ
 けれども、月を経たので、眞白な埃に成つて、銀色
 に朧々、處々けばが立つ。正面が二枚の襖で、其の
 押入である事は、これも一枚開いて居たので直ぐに
 知れた。横に三尺の、上下を仕切つて、下が扉の板
 戸に成つて、上が、細い木格子の障子の戸。

向つて左が、ずらりと並んだ四枚、白茶けた壁の
 やうな同じく襖で、其の正面の二枚も又寸分違はぬ
 模様であるから、悪く明るくつて靄の中へ入つたや
 うな、・・・其處へ入りたてに、其の四四枚
 の襖の、手近な端の一枚、颯と開けて見ると、三
 疊で女中部屋にあてたらしい。縁なしながら、疊は
 これも新しい。向うの破障子の外は、臺所と額か
 れた、――此の勝手口は、玄關の戸と並んで居
 る事に成る。

尤も其處等に、人の居さうな氣勢はなかつた。

すつと閉めて、此から奥へ、と立直る、と障子が一幅眞赤になつて、火柱のやうに忽然と顯れた。建具が不意に血に染つて駈込んだのか、と思つたが、然うでない。右の方が其の障子で、同じく一枚、開いて居る……其處へ、隣家から燈がさしたので……燈も、洋燈の、ぬい、とした火屋のまゝ、差配の顔と袖垣の上へ並んで出て居た。其の灯に近い、澁色の苦い顔が、それ、言はぬことではない、人の内で帽子を被つて居る。

其處は姨さんの許の明取で、覗くと、ばあ、と言ふほど近い。庭と言ふのも、疊を縦に四疊ばかり、手を伸ばすと、此方の手が、其古帽子の庇に届く。此處で差配の顔を見たのは、娑婆以來と云ふ氣かする。

「ありましたか、」
「居ますかい。」
と同じ時一所に低聲で云つた。差配の尋ねた意味は言ふまでもなく分る。此方は煙草盆と箆板を聞いたのである。其の雨戸、此の小庭、娘が裁縫をした

處も略知れる。袖垣も低いから、坐つて居ても、帶の結目あたりまでは、此處から見えよう。

「差配は、逸疾く其の意を得たか、押潰されたほど小さな聲して、」

「ありました、其處にな。其の、」
と言かけて、何故か、差出して見せさうな洋燈を、づいと引いて暗い庭を尚眞暗にした。が、灯を引く拍子に、水があるか、きらりと波のやうなものが淡い庭の中で光つた。

「私も思はず、同じやうに提灯を引込めた。」

「右二品とも、私が今取込んで遣りましたが
な．．．．．」

「閉めて下さいよう、後生ですから、閉めて、」
と、うら若い、美しい聲ながら、絞るやうに急込んで、次室から呼ぶ。

「おほ、閉める。閉める。．．．．．ではな、御緩り御研究下さるやうに。」

で、がらりと雨戸を繰り出すと、絲のやうな灯に

なりつゝ、亂れかゝつて、ちぎれて隠れた。 . . .

さて些と心細い。慾、娑婆馴染の顔を見たので、
少なからず里心がついたが、

「こりや不可ん、馬鹿な、まだ疊をものゝ三枚と
は踏んで見ない。」

一時に六疊、ぼさ／＼と歩行いて、向うの角へ、
此處が又細目ながら、人の入るだけ開いて居た。些
と煩いけれども、今言つた其の四枚の襖の端なので
ある。

及腰ながら、一寸覗くと、向うは壁で、 . . .
. . . 間が窮屈な廊下と見える、二二階へ通ふ歩み
らしい。

然うすると、片端が女中部屋で、眞中の二枚が押
入に成つて居よう、 . . . 確か二階は二間とあつ
た . . . 部屋数の少い割に、押入の詭は、住め
る都合。

と満更 R u b y > 見に入つた目的を忘れもしない

で、心づもりこころづもりに積りながら、いで、二階にかいを、と襖ふすまについで頭あたまを上げたが、些ちつと頭かしらが重おもい。

狂人きちがひだと危険けんのんだし、死んだものとするしと、其その死しに態だまが氣きにかゝる。私わたしは實じつは、誰たれかゞ此この貸家かしゃへ入はいつて自殺じせつをしたのではあるまいか、多分たぶん、と初はじめから思おもつたのである。

八

此時このときに成なつて、はじめてて挺てこでも、動うごけまい差配さはいは固もとより、血氣壯けつきさかんな職人しよくにん 徒てあひまで、空屋あきやへ入はいるのを阻はげんだわけが思當おもひあたつた。先刻さきのほどは、餘あまり物々もの／＼しく

て、渠等が心から恐れるのか、何うか、聊か疑はぬ
でもなかつた處。

で、一層疊屋が歸るやうな顔色して、此なり提灯
を提げて出ようか、と考へたけれど、何うやら、其
だと、却つて魅まれたらしい氣がして成らぬ。・

・・・まよよ、駈上つて、飛下りろ！

泡を吹いて睨まば睨め、兎に角、二階を見よう、
と肩を聳やかして、畝り込む如く、襖の細目なのを
其まよ、狭い廊下へぐい、と潜る。

又濕つぽいがの薰！ 煤ではあるまい、眞暗なも
のが、むら／＼頭を壓して、壁の匂が泥のやう。踵
も冷たし、ヒヤリとする。何處も火の氣のない駿か、
蠟燭の火に、片手ばかり、赫とほてつた。

天窓の上で、・・・

「うゝ、」と唸る。

はつと思つて、立竈んだ時であつた。

「うゝ、／＼、・・・暮れてこそ里路の家

は知られけれ、片山陰の窓の灯……か——
然うだつ！ ……
と勢込んで、どんと足を踏んだ音がした。凄じく
耳に響いて、天井を打抜いたか、とぐら／＼と體が
震へた。

襖の所へ身を返して、恚う灯を膝へ取つて、上を
透かすと、暗い天井が仄に見える。——直ちに其
處が階子段で、又其の段の急な事、恰も階子を突立
てたやうで、新しい角が鋭く、石を切立て、とばか
り不思議に嶮しい。

それだけに、又數も細かに刻んであつた。と見る
と、凡そ上り口までに三十四五段、家中眞黒な鳥羽
玉の黒髪に、偉大なる黄楊の櫛を斜にさした趣があ
る。

ト其の八分目ばかりの處に、鼻が留つた形で、
圓く成つて、蹲み込んだ男が居た。が、下から現下
見上げた時、仰向けに背中を段に、片足を踏伸ばし
た、と思ふと、兩傍の壁を左右の手で引搦んで、胸
と腰で尺を取つて、ずるりと一段、蹠を離して下

りる・・・

「断崖絶壁だぞ、こりや、恐しい崖だ。危い、はあ、何うも・・・何て急なんだらう、ー
さあ、殺すなら、殺せ。」

私は思はず摺下つた。

「や、灯が隠れた、ぢや、星だつたかな。谷、谷
底に星は變だ。うむ、矢張燈だ。うゝ、孤家の窓の
燈・・・あゝ、又見える・・・難有
い。」

私は遁構をしながら、提灯を長く、手の伸びるだ
け差出す。

「お痛々々、ちよつ茨だ、何うも身體ア寸々だ。」

ー あゝ、足懸かない、さあ、弱つた、最う腕
が切れる、蔓が切れる、あつ、

と叫ぶと、四五段目まで漸との事で下りたのが、
手足も胴も疊まれたやうに、どた／＼とのめずり落
つるや、

「うむ、」と唸つて、ぐつたりと胡坐に成り、
がつくりと首を垂れる。

「何うしました、何うしました。」

烈しく耳の許で叫んだ。

顔を上げたが、紫色の唇をへし曲げて、血走
つた眼で熟と視めた、凄い面色。

「はあ、提灯か。」

「提灯ですよ。」

と、力を籠めて懇に私は言ったが、さて後で考へ
ると、可笑な問答。なか／＼以て、其折から笑ひ事
ではなかつた。

「僕は、僕は、」

と息を切つて、

「孤家の灯だと思つた、．．．．ぢや君の前
へ山の上から落ちたんだね、酷い目に逢つた、九死
一生です、助けて下さい、此處は何處です．．．

．．．

と、言ふことは取留めないが、氣が狂つた、と言

ふ様子も見えぬ。

「茗荷谷ですよ、小石川、小石川茗荷谷の二階家の貸家だ、貴下、」

トぱつと花火が出さうにきよろ／＼する・・・

「確乎なさい。」

「はあ。」

「分かりましたか。」

九

「二階です、二階です、此の二階です。」

と少時しばらくしてから、若い男わかをとこは階子はしごの二段目だんめに腰こしを掛かけて、大息おほいきを吐ついて話はなした。

「此この二階かいは、六疊でぶ、三疊でぶの二間まです。段だんを上あり切きつた處ところに、小窓こまどがあります。丁ど船底ふなぞこの明窓あかりまどと云いつた切方きりかたで、何なにしろ暗くらくつちや分わかりませんから、取とり附つきに、まあ、其それを開あけました。最もう一つ硝子戸がらすどが入はいつて居あますが、下町したまちかけて一面めんの見晴みはらしで、づゝと品川しながはの海うみが見みえようと云いふ工合くあひが、益々ますく船底ふなぞこの窓まどらしい。妙めうに高たかい、四方切立はうきりたての家いえですからね、大おほ方かた此この低ひくい地面ぢめんに建たてゝ見晴みはらしを賣物うりものにしたものでせう。其そので埋合うめあはせをつけた・・・何故なぜかと言いふと、其そのかはり、土地不相應とちふさうおうで、空地あきちも庭にはも何なにもない、明取あかりとりの申譯まをしわけに、其その障子しやうじの外ほかに些ちつとばかり、

と言いふ、話はなしを聞きく前まへに、其處そこは私わたしが閉しめて置おいた。

「其それも何なんです、隣家となりの長屋ながやと、つい目めと鼻はなの間あひだで、お剰あまけに境界きやうかいと言いつて、一寸袖垣ちよつとそでがきがあるばかり。僕ぼくが此處こゝへ入はいつて、突然障子いきなりしやうじを開あけた時ときには、其その袖垣そでがきから島田鬘しまだまげが見みえて、一寸覗ちよつとのぞくと、十九はたちか二十にじゅうぐらゐの温順おとなしさうな好いい娘むすめが、何なにか衣服きものを縫ぬつて居あた

のか、一つ内で、遠い次の間ほども間がない。餘り唐突に近い處に居るもんだから、僕は何です、自分で恚う、女の面でも冠つたのかと思つた。柴の垣に雪がちら／＼するやうで、それだけでも極めようかと思つたほどです。．．．．．それから二階へ上りましたがな。

今日は薄曇りで、どんより衣汁色をした明が、泥水のやうに其の小窓から浸込みました。

最う、薄暗くつても見えるから、小窓と、差向ひの襖を開けると、三疊で、――此が通から路地の突當りに見着きよく人の目を引くんですね。――

玄關の上へ突出したやうに成つて、欄干がついて、一寸した縁もある．．．．．廻り縁で折曲つた形に、亞鉛の雨樋が、仰々しくかゝつて、硝子窓を取廻した棟が眞四角で、見上げるほど高い。これで色硝子を嵌めると、凹字形の二階へ、橋の懸つた宿場の大筋と云ふもんです。――

其の三疊も、一體宙へぶら下つたやうで變ですがね、．．．．．最う一間の、六疊と言ふ方、．．

．．．これは尚ほ奇抜です。．．．丁ど此の階子段の突當りが其の入口で、唐紙の扉が一枚、其の明窓に附着いた壁の中へめくれ込むやうに成つて開く。一寸見には此の方が三疊の小部屋に見えま
す、が別に其に不思議はありません、――をかしいのは、トンと一段ばかり、頂を切込んだと言つた形に低くなつて、浅い六疊の穴に見える、ト閉込んだ處だから、ねんばりした木の香が、べた／＼と絡ひつくやうに、強くむつと來るんです。雨戸も障子もぴつたりでせう。一枚口から、窓の明が射すんだけれども、それも明が折込んで入る形で、如何にも暗い。

暗い中に、大晦日の風が凪いだやうに、疊が青々と浮上つて、數居際より一寸ばかり高く見えて、又其の、眞新しい香がする。へりの麻の香もする位だつたんです。

で、熟と覗込むと、其でも晝間ですものね、障子に切組んだ硝子を透いて、白い雨戸の木目が見えます。爾時目に着いた、．．．固より掛物も何

にもない、床の間の壁が、茶かゝつた萌賣色だ、と思ふと、横に袋棚があつて、金地の戸が嵌つてます。背を、陰氣な春の暮方の色をした……窓帷のやうな壁で包まれ、袖を、其の金の戸で劃つた、床柱の前、違棚との繼目の處に、端然として、正面に向いて、坐つて居る婦人があります。」

「婦が、」

と私は摺寄つた。

「えゝ、空屋の、貴下、手を立てたやうな階子段を上つて、窓はあるが、そりや僕が開けた——何處も閉切つた、むせるやうな木の香の高い、濕つばい、青い、其の沈んだ部屋に……餘り思ひ懸けないぢやありませんか。

我武者羅の僕も悚然としました。が、婦の居たのを怪しくつて恐いんぢやない。見た處が、其が、美いんで、餘り美人なんで、凄かつたんです。」

「けれども構ふもんですか。のさ／＼入込んで、其の前を少し離れた、右つ手の壁へ凭れながら突立つたんです。一重外は羽目でせう。上の・・・」

と二階を指して言った。が、顔は固く成つて振仰ぎはしなかつたのである。

「其の小窓から見える處で、

君、君。」

と無遠慮に聲を懸けたんです。

「矢張、家を見に来たかね。」

ですが、返事をしなかつた。無論、こりや當前で、けれども、失禮だとも亂暴だとも思ふやうな僕ぢやないので。

「ねえ、おい、貸家を探すのかよ。」 ツて、背

中を摺下ろしながら、其處へ片膝を支いたんですね。見返りもしないで、圓鬚らしい、高く結つた髪を靜に、雪のやうな、顔で、頭を振つた。

年増め、二才扱ひにしやがるな、と僕は癢に觸つて、

「だつて、おい、空家へ入つて一人で坐つてゐるのは可怪しいぢやないか。己が家主なら、何うする君？ 其とも其方が家主の女房か。」

と憚らず高笑ひをした……

「私は、隣家、の、もの、と一言づつ、句切つて、判然した、清いが、少し含聲で言つて、はじめて些とばかり伏目に成つたんです。が言葉つきが何うやら僕なんぞは、小僧兒だと思ふか、それとも蔑んでか、妙に威を見せた澄ました調子の、其の癖、何が口惜くつて、異う俯向くんだらう。と熟と見る。と何、然うぢやない。……膝の上に、帳面だか、手帳だか、小形の横本を置いて、膨りした瞼の裏へ、恚う字を吸ひ込みさうに視めて居る。片手に、細い煙管を持つたんです、其が何です、燈心蜻蛉を撮んだやうに薄りと……銀らしいのが、あの幻の羽で、膝の本も其の通り、蠟で描いた風に、浮出しながら陰のやうで。」

大概、これだけでも、可怪しく思はねばならないのに、まだ、希代な事は、其の婦が坐つた前に、香箱つて奴を拵へて、猫が一匹。」

「猫は、黒猫ですか、斑で、」と聞いた。

「否、然う思ふと女の顔です。」

「え。」

「まさか、如何に僕だつて、猫の顔が女ぢや、や

あ、とか、わあとか、叫ばずにや居られませんか。

と見ると、犬張子― あ、の、黛を描いた、莞爾した、擦つたい顔で、人魚が能装束をした形の、あれです。

思ひもかけない處に、凄いほど美しい婦が一人、其の態度で、氣高く控へて、前に犬張子を据ゑた、と言つたら何と考へます。― あやしいものと思はなければ、強ひても高家の姫君か、夫人か、何かの洒落をするのだ、とお思ひでせう。

處を、僕は私窩だ、と思つた。

「あ、隣家の、……ぢやあの裁縫をして居た娘の姉さんか。」

本を見ながら、頷くではありませんか。

的切だ。で、見て居る本は玉帳だ、と不埒な事

を。」「……………」

と言ひかけて、じり／＼と煮え立つ蠟燭に、颯と

白面を赤らめたが、

「第一服装ですが、手が動けば玉が輝く、袖が振

れゝば蘭奢が薰る。羽織は着ない……………衣服

はと言ふと、薄い藤色の地に、影のやうな紫の艶

が照つて、帯の底が黄金色に光るんでせう……………

・

濕地に、倭い、薄暗い、蟋蟀箱のやうな、あの長

屋の、姉の方にしろ、何にしろ、こんな風采が出来

るものか。

何處か盛場の商賣人が、親許へ遊びに来て、空家

に籠つて、情夫の事で物思——はよく見た方で、

悪くすると、隣だから可い僥倖に銜へ込んで、客を

歸した跡だらう。

すると、裁縫をして居た妹の方も同じく賣るぞ。

可、あの容色を見たゞけでも、腹の中ぢや引越すこ
とに先刻から極めてある。おもしろい、牡丹と芍薬、
両手に提げて、階子の中段でおのれ一番、獅子の狂
ひを見せて遣らう。

「姉さん、僕はね、華族の次男で、勘當された宿
なしだ。東京中駈廻つても住めるやうな家がな
くつて、最う草臥れて動けやしない、此處で寝かしち
やれないか。」

婦の裾の方へ足を向けて、横から、面を視めなが
ら肱枕で倒れかゝつた。

「あるべき事とは思ひますい。しかし事實で
す。今日と云ふ今日は驚きました。懺悔だから聞
て下さい。何しろ逢つたばかりの婦人に、自分で華
族の次男だと、名告を上げるのも可笑しなもんです
がね、大抵の婦人に是が又不思議に利く。過般も、
其の調子で、何と、公園の塔の中で、一人承知をさ
せた経験があるんですね。

其に又、華族も次男も眞個なんで、不品行のため
に、家は追出されて居る身分ですがね、・・・・。
母の内證の仕送りで、何三人や五人のくらしには不
自由しません。其の手當で勝手放題、一人で轉がつ
て居たんですが、些と下宿屋にも飽いたから、家を
持つて見ようと思つて、探して居る矢先なんでせう。

今言ひまして、其處へ大の字に成らないばかり、
傍若無人に寝轉んだけれども。目のふちを桃色にも
しなければ、頬のあたりを蒼くもせず、澄まして、
其の小本から目を離さずに讀んで居る。

落着きさ加減が憎いから、むつくり起返り状に、

『お見せ。』

と言ふと、引手繰つた。何か、言はれない、手弱
い、柔かな、絹のやうなものが繫つて居るやうに思
はれて、本は僕の手へ來たんです。

爾時、白魚のやうな婦の指が伸びたんですが、不
可い、と追つたのぢやない。手は膝の前の犬張子に
懸つて、あの蓋を、女の童と言ふ奴を、胴切にした
やうに横へ取つた。

僕は本を見ました。開いてた處が、・・・・

木曾路之記

日本橋より板橋へ 二里

大傳馬町 本荷百十二文

南傳馬町 から尻七十文

日本橋より左の方に御城見ゆる右の方は本舟町
さかながし也室町三丁目十軒店白銀町今川橋のり物
町鍛冶町二丁鍋町新石町須田町右にすぎちかひ御門
是より上野坂本千住へも行く也日本橋より十二丁昌
平橋を出て直に行けば湯島天神也池のはたへ行く左

の方板橋道なり坂を上りて神田明神聖堂湯島五丁目
なり四丁目左りに馬場あり本郷六丁目森川宿より追
分左にけいせいがかくば駒込通り王子岩ぶち日光道中
也左板橋道竹町七八丁行く左り坂あり坂下右に白山
ごんげん駒込の末染井竹町より直に行くおかご町す
がも町左の方に地藏あり是江戸入口ノゝにある六地
蔵なりすがもを出て左右板橋まで畑なり左に道あり
四ツ谷赤坂邊へ行くに近し是より雑司ヶ谷へ近し板
橋近くなりて一里塚平尾此間に川越道あり

板橋よりわらびへ 二里十町

本陣 飯田新左衛門

問屋 藤三郎

同 八郎右衛門

本百十二文 から七十文

・・・・・・・・・標題に僕の苗字があつた。」

と渠は云つた ー 固より一寸見たばかり、悉
しくは読みもせず、且つ細かに覚えて居て、爰で語
つた次第ではないが、あり合せの道中 記から一面
倅を寫して置く ー 尤も其の木曾路とあつた

のは忘れぬと言ふ。――

「馬鹿々々しくつてね、……」
「何だ詰らない、僕は又、ナこかと思つた。」
「ばらりと投返すと、薄いのが、褌の深い、膝に乗つたのを見向きもしないで、袖の筋をしなやかに、忘れた風に、袂の許へ仰向けに持つて居た煙管を上げて、上から俯向けにして、スーツと其の吸殻を、今蓋を取つた犬張子の胴へ落す、と心持頬が細つて、美しい眉が判然しました。艶麗さが、又見勝る。」

「よう、おい、姉さん、命がけで頼むんだ。」
「否應は言はせまい、死物狂で迫りました。」

「静に――服吸附けながら、
命がけとは、死でも可い事。」
「當前よ。」

と言つた時、其の何です、……今落した吸殻が、犬張子の中で幽に燻つて、變な臭が芬と來た。

「をかしな、人を焼く臭がする。」

「それが厭で、生命がけになれますか。」

「うむ。」

と僕は目を閉じたが、

「大好よ、可い香だ。」

と婦の膝の上へ手を置くと、藤色の影が紫に甲に映つて、ヒヤリとしました。

「では、其れでは、」

と柔かに衣の揺れたトタンに、火のついた煙管を僕の手へ載せようとする！

十二

「吃驚して手を引込みます。」

「卑怯だね。」

と煙管をさして、筒ごと帯へ挟むのが、乳の下へ消え込むやうに失くなる……道中記は、袖を返して袂へ入れたが、此のくらの重さでは振も亂れず、其まゝすつと、立つと、床の間の壁に衣服が薄く、袋棚の金地の戸に帯が濃く、雲と空と分れて映つて、澄まして出て行くぢやありませんか。腰を支いて、呆氣に取られて見て居た僕は、總身火のやうに成つて、赫と起きた。

「焼け！ 焼け！ さあ、己を焼け。」

ツて喚くと一所に、ドンと膝摺に飛鎚つて、今、一段上へかけて山鳥の亂れた裾を、しつかりと、押へるより、捌くのが軽いこと。蹴出し褌が花野を包んだ霧のやうに、此方の袖を掠めた、と思へば、雪の足首が翩然と上つて、立直ると、さすがに揺れたが、一筋も亂れない鬢の毛に手を掛けた……居たのは變でせう……而して、あの小窓の前から肩越に見返つた姿が、明い處で、却つて灰汁のやうな其の空の色に曇つて見える。

『焼けよ、焼けよ。おい、さあ、煙管で焼け、火
で焼け、炎で焼け。』

と取、迂らした裾のあとの、敷居を引搦んで其一段低い座敷の隅から、扉を覗いて、見上げて叫んだ。眉は釣るし、眦が裂けさうなんです。男も婦も、こんな侮辱を受けたことは生れてから嘗てない。口惜くつて、癩に障つて、肉も粉に骨もめり／＼と砕けさう。眞個、薪を積むんなら、自若として焚かれて見せう、と然う思つた。

と熟て見て居ましたかね、莞爾して、

『私は不可い、妹を・・・』

ツてあやすやうに額いたんです。――湧上る血は少し冷えた。何の道兩手に花なんだ、中年増め、汝、今に見ろ、唯置くものか。で、

『相手は選ばん。ぢや妹に焼かせて遣る。』

それから、衝々と此の梯子段を下りるのを上から見ると、光のない婦人の形の星が流れるやうでしたつげ。

後あとについて、其處そこの明取あかりとりの縁えんへ出た時とき、婦人をんなは最もう袖垣そでがきで帶おびを仕切しきつて、肩かたを見みせて、後姿うしろすがたで立たつて居ゐました。横合よこあひから透すかして見ると、片袖かたそでが、其處こゝにせつせと針仕事はりしごとをして居ゐる、妹いもうとの、針はりの運びはこに俯向うつむいた、其その顔かほの蔽おほひに成なつて、美うつくしい島田しまだの根ねと、白しろい襟えりばかりが目めに付つく。

「うむ、談判中だんぱんちゆうだな。」

で、何なんです、故わざと素知そしらぬ顔かほで、縁側えんがはへ踞しゃがみみ込こんで、閨ねやは此このくらゐな光線くわうせんが詭あつらへだ、など、勝手かって次第しだいな了簡れうけんで、隅々すみずみは最もう暗くらい、袖垣そでがきなどには夜よるの色いろが染しみ込こむ、雀色すずめいろ 時ときの其處そこの小庭こにはを、熟じゆうと視みつめて居ゐましたかね。

「あゝ、能よく出来できた、まるで、深山幽谷しんせんいゆうこくの状さまだ。」

「は、成程なるほど。」

私わたしは時ときに固唾かたづをのんだ。

「芥こいだらけの、濕しめつた庭にはの眞中まんなかど處こゝに、誰だれが拵こしらえたか、小ちひさな築山つきやまがある、．．．．．土つちを奘もつて石いしを積つんで、雑木ざふぎを植うゑて、下したに金魚鉢きんぎよばちほどな、しつ

くひ叩の池がある、と言へば其れまでゞすけれども、
其の石が、妙義榛名の巖とも見えれば、槍が嶽の峰
にも擬ふ。青苔の煙る風情が、淺間が嶽、霧島山の
霞むやうで、樹も又、秋葉の森、羽黒、葉山に相應
しい。路がついて、坂がある、梢で切れて又續く、
續いて中斷えがして空へ幽に繋がる、と視る中に、
―― 蟻のやうな木挽も居れば、炭焼の小屋の松
毬の如きも見える。．．．．．やがて泡のやうな、
白い小さな雲が、ぼつ／＼と湧いて、森の中、谷陰
に、白粉を流したやうに擴かつて、路も峠も、木樵
の姿も、炭焼の小屋も隠れた、と思ふと、．．．．
・ 谿河の微な音も、幽な松風も、ひっそりと止ん
で、寂と成る。．．．．其の内、點々口紅を打
つたやうに、何處の谷へか、灯が點くではありま
せんか。

人間界を離れたやうだ。吃驚して、

『おい、煙草の火をくれ。』

フト自分に返つて、談判の催促かた／＼呼んだ
んです。

何うでせう、すつと、築山の上へ、宙な處へ、向うから煙草盆が出ました。僕は天上から振下つたのかと思つた。驚いたのは、其を持つた女の手の大きいこと、五つ並んだ雪の蜂を見るやうなんです。はつと思たが、何の、山を見た目がちらつくんだらう、……しかし、一寸でも驚かされたのが、口惜いから、

「こんな火で焼けるものかい。」
つて、向うへドンと突いた、煙草盆はぶらりと動いた。

婦が袖垣へ袂をかけて、片腕をソツトついて、眞白な片手で招く。

幾ら何でも、青樓へ下駄を穿いては入れん、と同時に、私窩宿だつて、跣足では跳込みますまい。庭が、ですね、差出す煙草盆は、途中で手が行逢ふんですが、袖垣があるだけに跳越せません。

婦人が其時、垣の間から築山の上へ渡して、四角な板をかけました。渡れ、と言ふ。それが、あの、

裁板たちいただつたぢやありませんか。

積つもつても知しれる。どんなに狭せまいたつて、金魚鉢きんぎよばちでも、池いけさへある。此この板いたが向むかうから届とどくわけはなかつたんですが、何なに、其處そこへ氣きの付つくゝらゐなら、最もつと目めの覺さめる事ことは澤山たくさんあつた。

さあ、踏掛ふみかける、と一方ほうが最もう暗くらく成なつた、暗くらいのが樹立こだちなんです。見上みあげるばかりの大樹たいじゆきよぼく巨木きよぼくか参すく差くある。おや、と後退あとすびりを遣やると、向むかうの巖いはがぐら／＼と揺ゆれる。．．．．．驚おどいて、飛とばうとする、目めの下したへ、雲くものかゝつた尖とんがつた峰みねがぬいと出でて、あつと眼めが眩くらむと、恐おそしくむせ返かへつたは硫黄ゆわうの臭にお、虹にじの兩端りやうたん、雲くもの中なかから燃もえはじめ、足許あしもとへ焰ほのほがかゝると眞逆まっさかさま様に落おちたんです。

が、自然しぜんと我われに返かへつてからも、名なも知しらず、所ところも知らない、深山しんざんの崖がけを傳つたひ／＼、暗やみの中なかを何なにれだけ歴廻へめぐつたか分わかりません。貴下あなたの灯あかりを認みとめた時ときまで、大方おほかた、幾度いくども二階かいへ上あがりりしたのでせう。．．．．

．．．
L

と溜息をほつと吐いて、

「僕は何を言つて居ます、貴下には分つたでせう

か。」

と覺束ない目を見据ゑた。

提灯が、ハツと消えた。戸外はざつと氷雨に成つた。

私から差配に話すと、佐々木源兵衛、帽子の上から額を壓へて、歎息した。

「何とも何うも……昔から、此の臺町筋、白山の間の空、巢鴨、庚申塚、板橋をかけて木曾街道へ、其の通り魔の歩行く路で、異形なものが時々見えます。状々工夫をして建直すですが、魔のためには、並木の掛茶屋と云ふ家相でかすかな。」

差配は、それ以來、お美嘉に對する邪念を絶つた。飛だ人の妹分で指もさせぬ。

後で知れたが、裁板と、煙草盆のひとりで行いた、と云ふ、其だけは、婦の浅い智慧ながら、お美

嘉親子が、折を見て計らつた造事である。――
種々かせを懸けられて其の長屋を引越せないで、
恐しさに託けて、差配の手を遁れやうためであつた
・
・
・
・
・

お美嘉は日を経て、子爵木曾の次郎の夫人になつ
て、其のあやかしの憑いた二階家に住んで居る。が、
娘は聊も恐れない。其の時の美しいのは、貞操の権
化で、處女を守護する女神のやうであつたから。

【完】